

史跡 南禅寺境内

2009年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

史跡 南禪寺境内

2009年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、建物建替えに伴う史跡 南禅寺境内の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

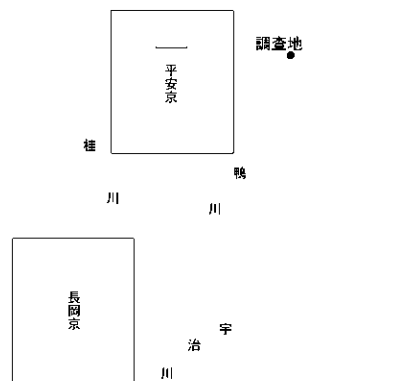
平成 21 年 6 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 史跡 南禅寺境内
- 2 調査所在地 京都市左京区南禅寺福地町内
- 3 委 託 者 宗教法人 南禅寺 代表役員 中村文峰
- 4 調査期間 2009年4月22日～2009年6月2日
- 5 調査面積 328 m²
- 6 調査担当者 東 洋一
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「岡崎」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 遺構の種類によって分けられたので遺構番号は使用していない。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 東 洋一
付章：竜子正彦
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
2. 調査地の位置と環境	2
(1) 位置と環境	2
(2) 既往の調査	3
3. 遺 構	4
(1) 基本層序	4
(2) 遺構	4
4. 遺 物	10
5. ま と め	13
6. 付章 自然科学分析	15
(1) 石組溝の石材	15
(2) 種実等の分析	15

図 版 目 次

図版 1	遺構	1	調査区全景（東から）
図版 2	遺構	1	石組溝掘下げ前（西から）
		2	石組溝東部（北西から）
図版 3	遺構	1	参道断面（攪乱西壁、南東から）
		2	石組溝南側断割状況（西から）
図版 4	遺構	1	試掘 1 区完掘状況（南から）
		2	試掘 2 区完掘状況（南から）
図版 5	遺物		出土遺物

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：400）	2
図3	調査前全景（北西から）	3
図4	作業風景（西から）	3
図5	調査区東壁断面図（1：150）	5
図6	遺構平面図（1：150）	6
図7	参道断面図（1：50）	7
図8	石組溝・参道断面図（1：50）	7
図9	石組倒壊状況（西から）	7
図10	石組溝・石列東部実測図（1：50）	8
図11	石組溝・石列西部実測図（1：50）	9
図12	鎌倉時代から室町時代の出土遺物拓影・実測図（1：4）	11
図13	江戸時代の出土遺物拓影・実測図（1：4）	12
図14	出土土製品	13
図15	石組溝石材	15
図16	自然遺物	17

表 目 次

表1	遺構概要表	4
表2	遺物概要表	10
表3	自然遺物一覧表	16

史跡 南禅寺境内

1. 調査経過

南禅寺境内に所在する宿坊施設「南禅会館」(昭和36年建設)の建替えが計画された。当該地は史跡南禅寺境内であり、埋蔵文化財の確認調査が必要とされたため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課(以下「文化財保護課」という。)の指導のもと、南北約28m、幅約3mの試掘トレンチを2条並行に設定し、東側を1区、西側を2区として、2009年3月16日から同月31日まで試掘調査を実施した。その結果、両トレンチの南で東西方向に延長すると考えられる石組と、盛土造成した参道を検出した。これらの遺構の広がりや年代を確定するため、文化財保護課の指導により発掘調査を実施することとなった。

本調査では試掘調査で検出した参道と石組を中心に東西約22m、南北約10mの調査区を設定した。2009年4月22日から重機による旧南禅会館の基礎および攪乱の掘削から開始した。なお、試掘トレンチ1区・2区の北半において、地表下2.8mで地山を確認するとともに、調査区北部は近世後半の湿地状堆積であることがわかった。一方、石組南側では中世末から近世初頭の堆積土層を確認した。ここでは下層遺構は検出していない。

発掘調査の結果、参道は中世に遡ることや南禅寺伽藍の中軸線上に位置することが判明した。また、石組は東西方向の石組溝であることを確認した。さらに、石組溝南側壁直上では、後の補修とみられる東西方向に並んだ小振りの石列を検出することができた。

調査中5月13日に文化庁の視察があり、参道と石組溝・石列は保存されることになった。遺構

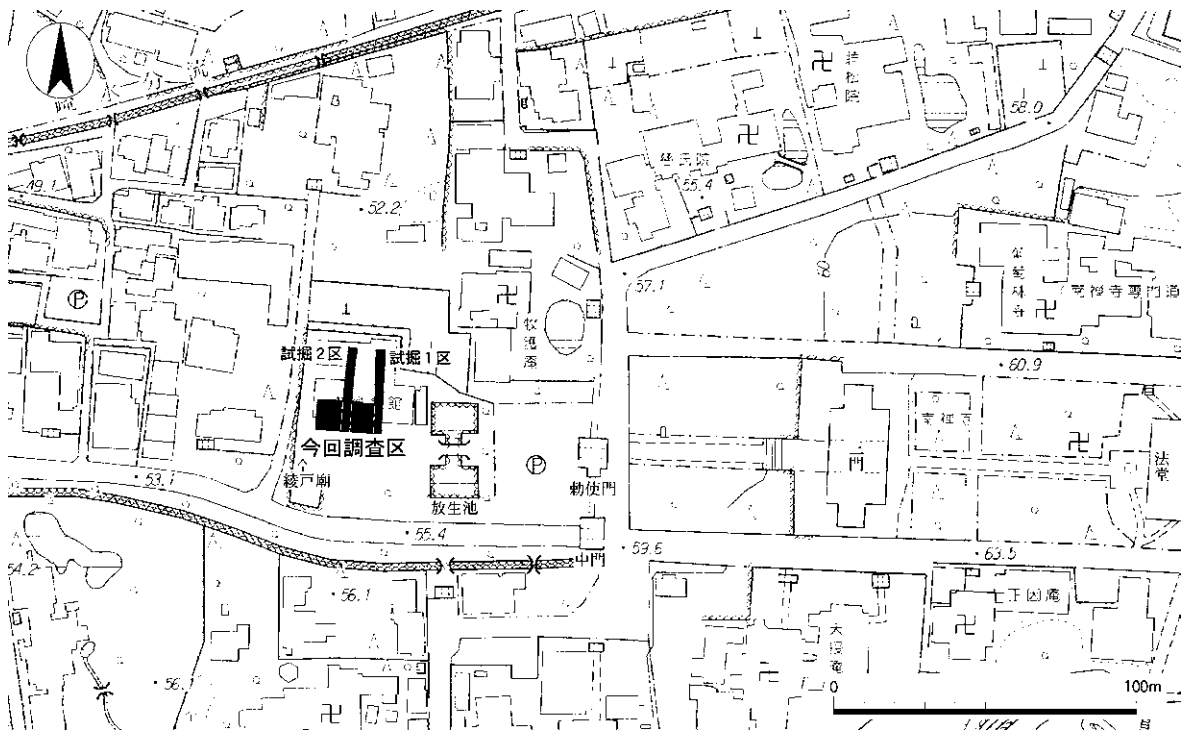


図1 調査位置図(1:2,500)

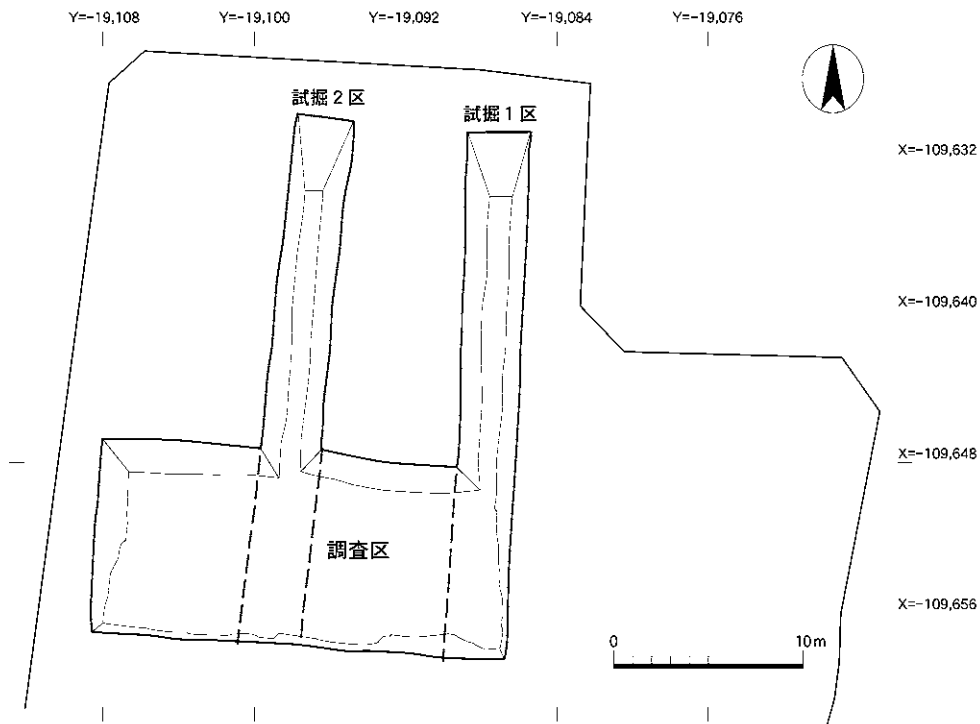


図2 調査区配置図（1：400）

は、永久保存に耐えるように土嚢で覆い、その上にスサ土を 30 cm盛って養生した。その後、調査区を埋め戻し、6月2日に全調査を終了した。

2. 調査地の位置と環境

(1) 位置と環境

南禅寺は東山山麓の緩傾斜地に立地し、伽藍中軸線を東西方向に向けて西面に建立されている。伽藍南側に並行して東海道が東西に通じており、京都の出入口（粟田口）として古来より交通の要衝となっていた。南禅寺の西側には、南禅寺の通用門となる中門と、その北側に勅使門が並び建つ。勅使門に至る参道は現状では駐車場となり、放生池の石橋にその名残をとどめているにすぎない。調査地は放生池の西側に位置している。

南禅寺は亀山法皇が勅命によって正応四年（1291）に、生母大宮院姑子の御所禅林寺殿に無関普門を開山に迎えて龍安山禅林禅寺としたことに始まるが、禅寺としての伽藍が本格的に造営されたのは二世の住持で造営のために「搬土曳石」を唱えた規菴祖圓（南院国師）の時代で、正和二年（1313）頃には寺観も整ったとされている。このことから南禅寺では祖圓を「創建開山」と呼び、また「搬土曳石」を教義の根幹に置いている。その後、後醍醐天皇によって臨济禅寺の中でも「五山第一」とされ、また、足利義満によって「五山上」に格付けされた。それ以降「五山十刹」制度が廃止される明治維新を迎えるまで最高位の寺格を保ち続けた。

創建から約百年後となる明德四年（1392）の大火災によって伽藍のほとんどを消失したが、その後すぐに再建された。しかし、15世紀半ばの文安四年（1447）の火災によって再度、伽藍の



図3 調査前全景（北西から）



図4 作業風景（西から）

大半が消失したが、2度目の火災後も、幕府の協力もあり伽藍復興は順調に進んだとされている。この短期間に再建が2度もなされたことは、南禅寺がその都度、臨時の関所を東海道に設けたことと無関係ではない。時代は遡るが、応安二年（1369）に三門修造のため南禅寺が関所を設けたことを契機に、三門が破却され、室町幕府内の政権交代まで惹起せしめたことは有名である。しかし、応仁の乱で南禅寺の裏山が赤松氏の本陣となり、応仁元年（1467）にまたもや伽藍は全焼した。戦国時代の南禅寺は寺領を奪われ、塔頭間の争いなどで荒廃が続いた時代であったとされている。

衰退を続ける南禅寺が復興の糸口を見い出したのは、天下統一を成し遂げた豊臣秀吉による寺領安堵であるが、本格的な復興がなされたのは、江戸時代初頭、徳川家康の政治顧問として活躍し、南禅寺の二百七十世の住持となった以心崇伝が、金地院僧録となるに及んで南禅寺の権威は絶大なものとなり、文字通り「五山上」を確立した時代である。南禅寺に今日まで残る遺構はほとんどこの時期のものである。しかし、明治維新に至り廃仏毀釈運動の影響で「五山十刹」を統括する南禅寺の権威は衰退した。

南禅寺境内には主要伽藍の他に塔頭や由緒寺院等が存続しており、その歴史性と東山を背景にした風光明媚な景観を保っていることから、2005年に国の史跡「南禅寺境内」に指定され現在に至っている。

（2）既往の調査

南禅寺境内の既往調査は、昭和51年に法堂と南禅院の間の南禅寺収蔵庫増築に伴う発掘調査¹⁾が1件あるのみである。江戸時代の石列・道路状遺構・土坑・溝などの他に鎌倉時代から室町時代にかけての庭園状遺構を検出している。

註

1) 「南禅寺遺跡」『京都市埋蔵文化財研究所概報集 1977 - I』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1977年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図5・7)

調査区の層序は、調査区南端の盛土によって築造された参道部分と、現地表下約2.8mで地山となる調査区北半の落ち込み部分とに大別できる。

参道部層序 中世の参道部は、黄褐色系の礫の多い層と粘土質の層の互層で硬く突き固め、地山上面から約1.5mの高さまで盛土して築造されていた。調査範囲内の参道上面は平坦である。また、参道には特に砂利などを敷いた痕跡は認められなかった。参道上面には砂を主体とした近世の堆積があり、近世の堆積土層の上が現代の盛土となる。

北部落ち込み部層序 石組溝や石列が埋没後に堆積した土層である。粘質土層(図5-11~14層)が堆積し、粘質土層上面には礫層が堆積する。礫層は人為的に嵩上げがなされたと考えられる近世初頭の層(図5-9・10層)である。さらに北部礫層上面には近世後半の湿地状堆積土層(図5-7層)が堆積する。

(2) 遺構 (図5~11、図版1~4)

参道 (図7・8) 参道部層序で上記した他に、石組溝に掘形がなく、参道築造時の盛土層に類似した土層が直接石材に接する。このことから、石組溝設置と参道の盛土築造には密接な関連性があると想定できる。また、石組溝が参道に対し平行であることから、石組溝と参道とが一体で築造されたと考えられる。

石組溝 (図8~11) 石組溝は東西方向に延長し、長さ約20m分検出した。石組溝の底面に石敷きはない。溝の内法幅は約0.6mある。溝底面は西が低いことから西方向に流水していたものと考えられる。石材は長軸0.6m前後・厚さ0.3m前後・高さ0.4m前後の石を最下段に並べ、2段目以上はやや小振りの石を積み上げていた。石材は角の丸い自然石を用いる。花崗岩とチャートが多く、ひん岩・砂岩・珪岩・頁岩などもあり、大きさも様々である。石組は、南側では1~3段、北側では1~2段遺存していた。

南側の石組は、調査区中央東寄りから西側については、最下段の石組は未検出である。参道の盛土による土圧の影響によって石組上段が最下段の石組列より最大約0.6m北に弛み出たことによる。石組最下段はボーリングステッキなどで深査した結果、ほぼ直線で延長することを確認した。

石組溝北側の下にさらに古いと考えられる集石を確認しているが、石組溝保存のため断割調査

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
室町時代	参道、石組溝、石列	
江戸時代	参道、整地層	

※ 断面の位置は図6 参照

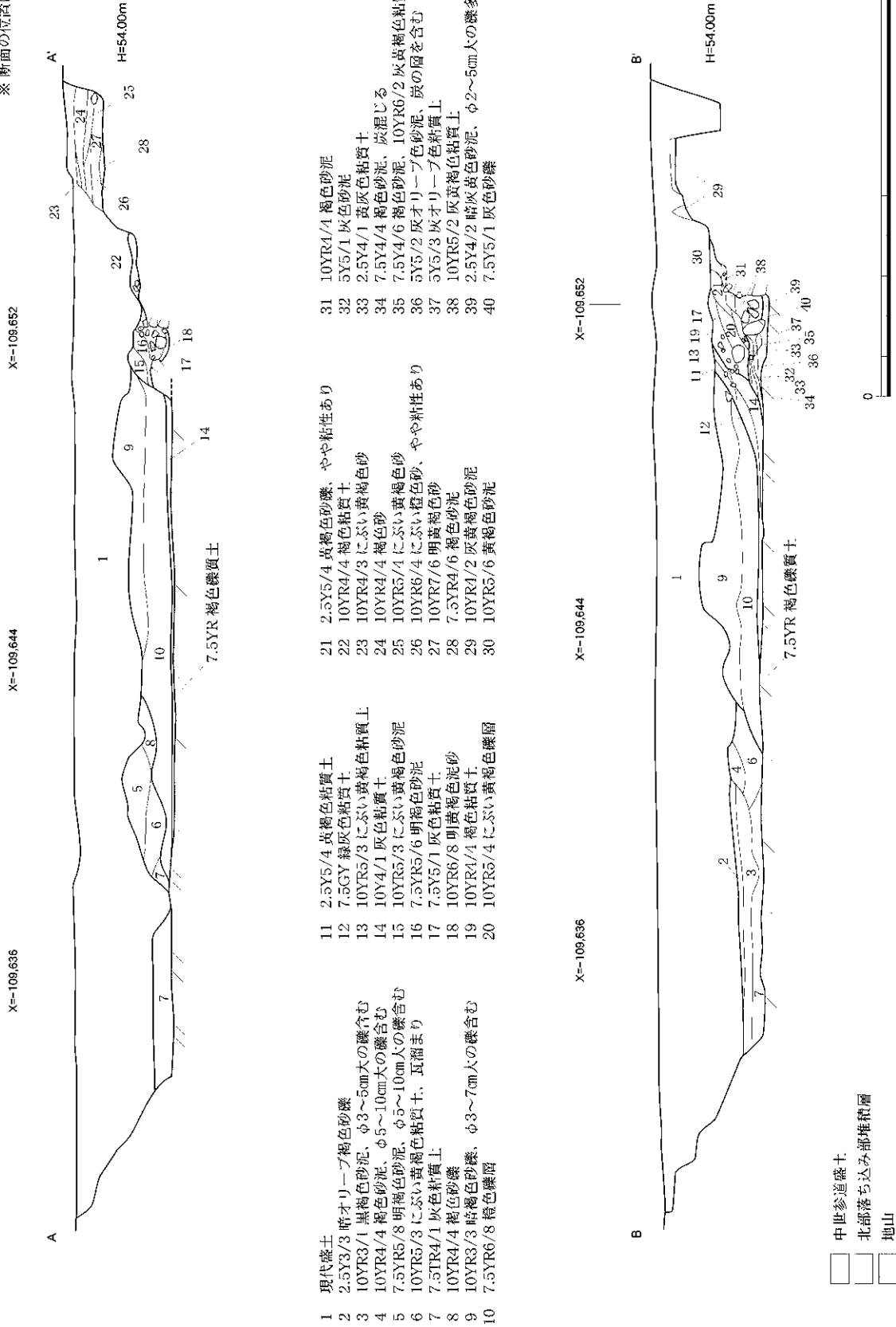


図5 調査区東隣断面図 (1:150)

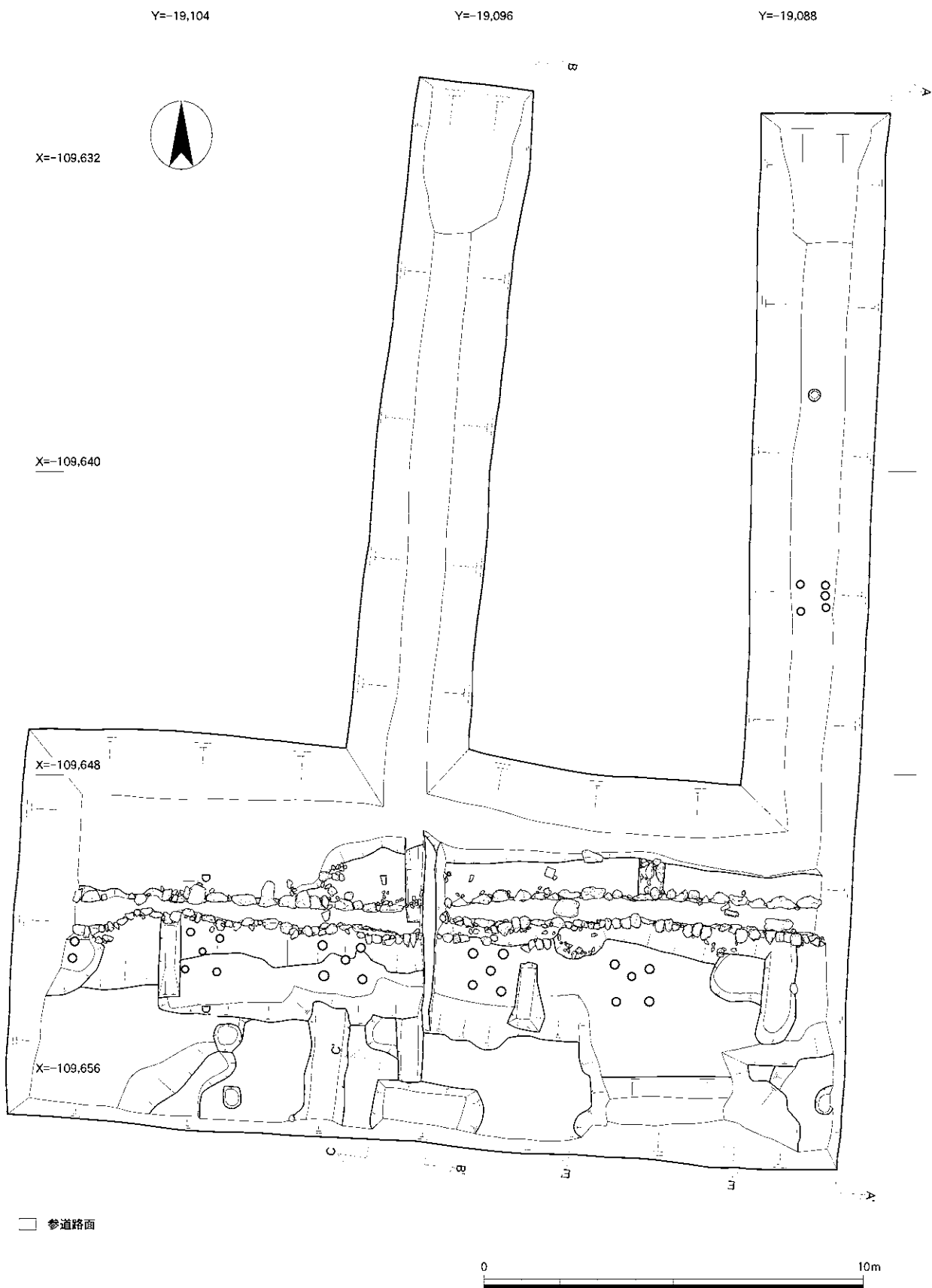


図6 遺構平面図 (1 : 150)

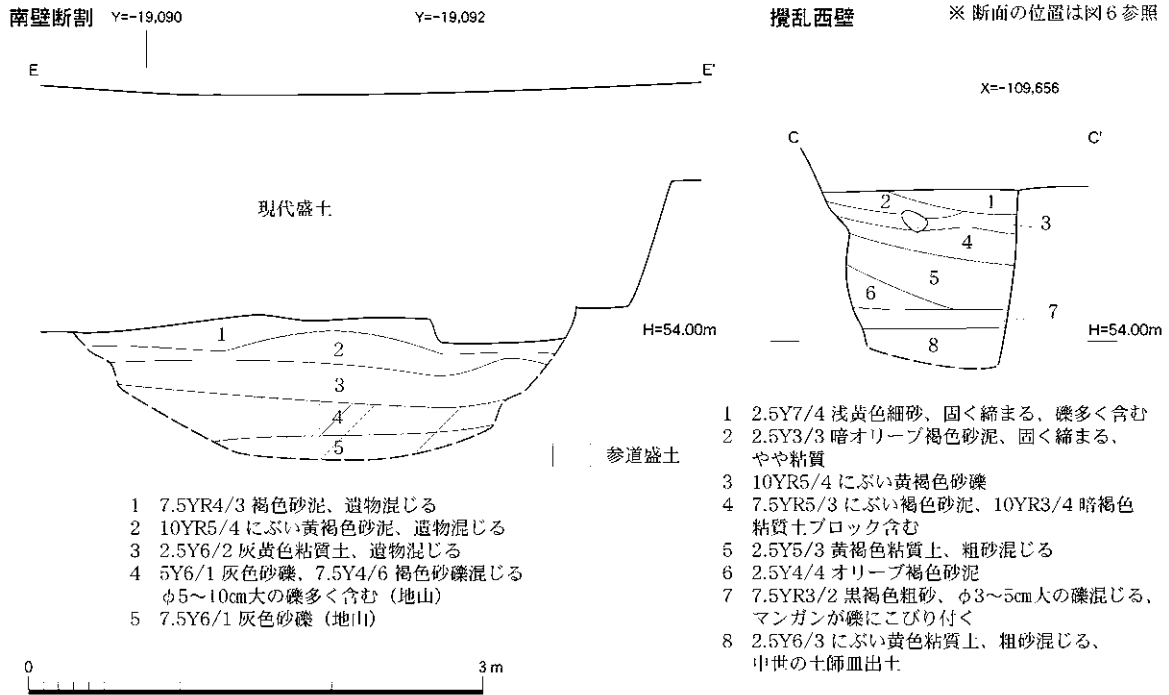


図7 参道断面図 (1:50)

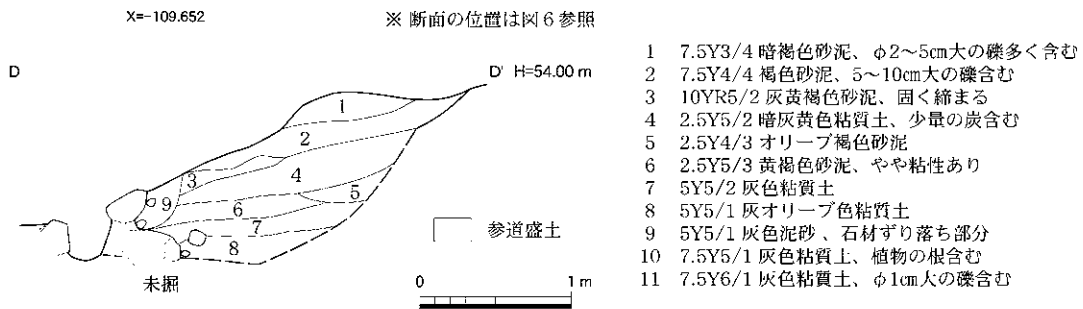


図8 石組溝・参道断面図 (1:50)

で確認するに留めた。また、石組溝東部東端の南側石組の下に長軸約0.80mの平坦な石が据えられていたが、この石が石組溝に伴うものか、それ以前の遺構であるのかは不明である。

なお、東部の石組溝中央で検出した長軸0.6mの花崗岩は、北側の石組2段目が倒れ込んだものである。また、西部の石組直上は近世後半の湿地状堆積によって覆われており、その際抜



図9 石組倒壊状況(西から)

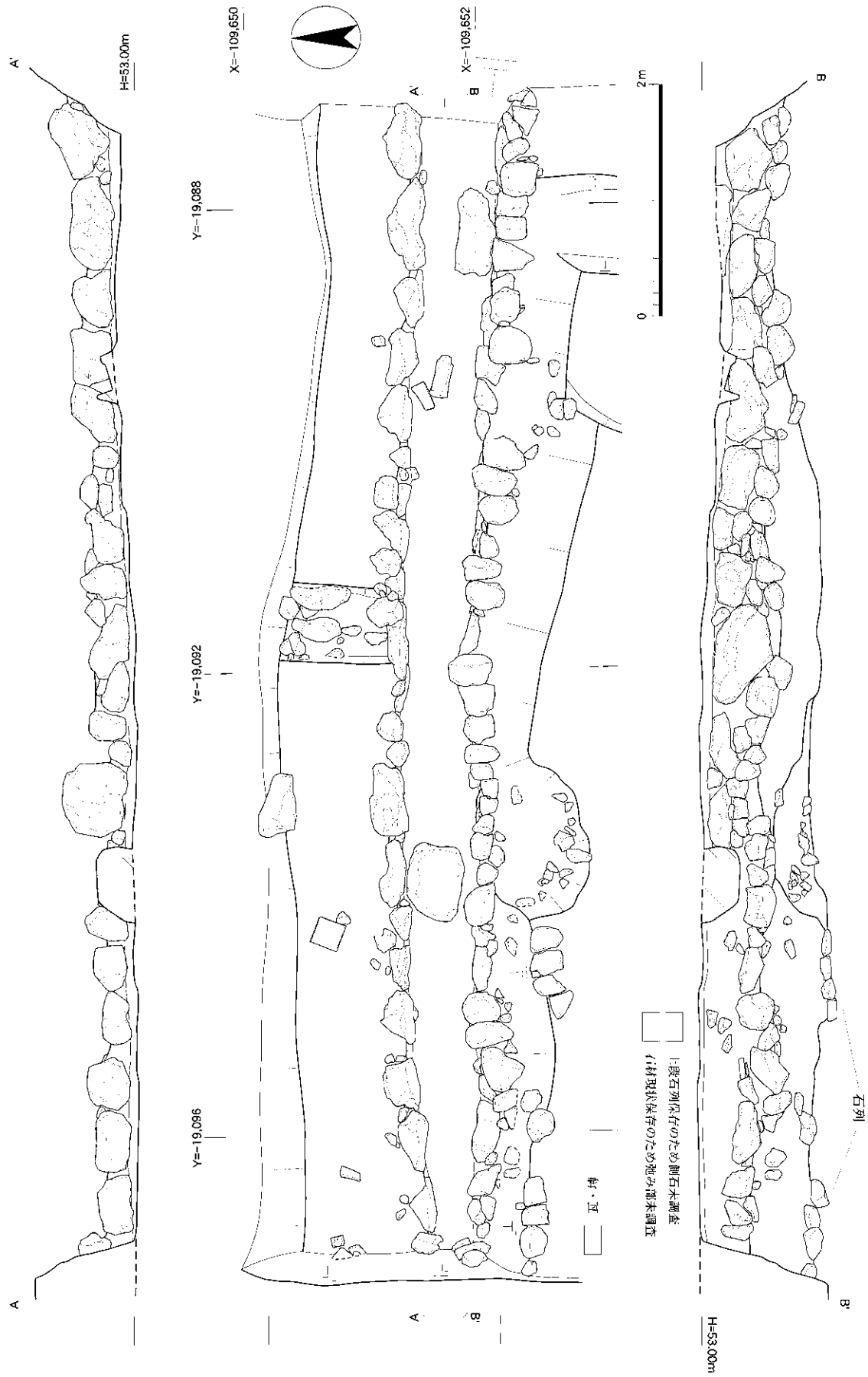


図10 石組溝・石列東部実測図 (1:50)

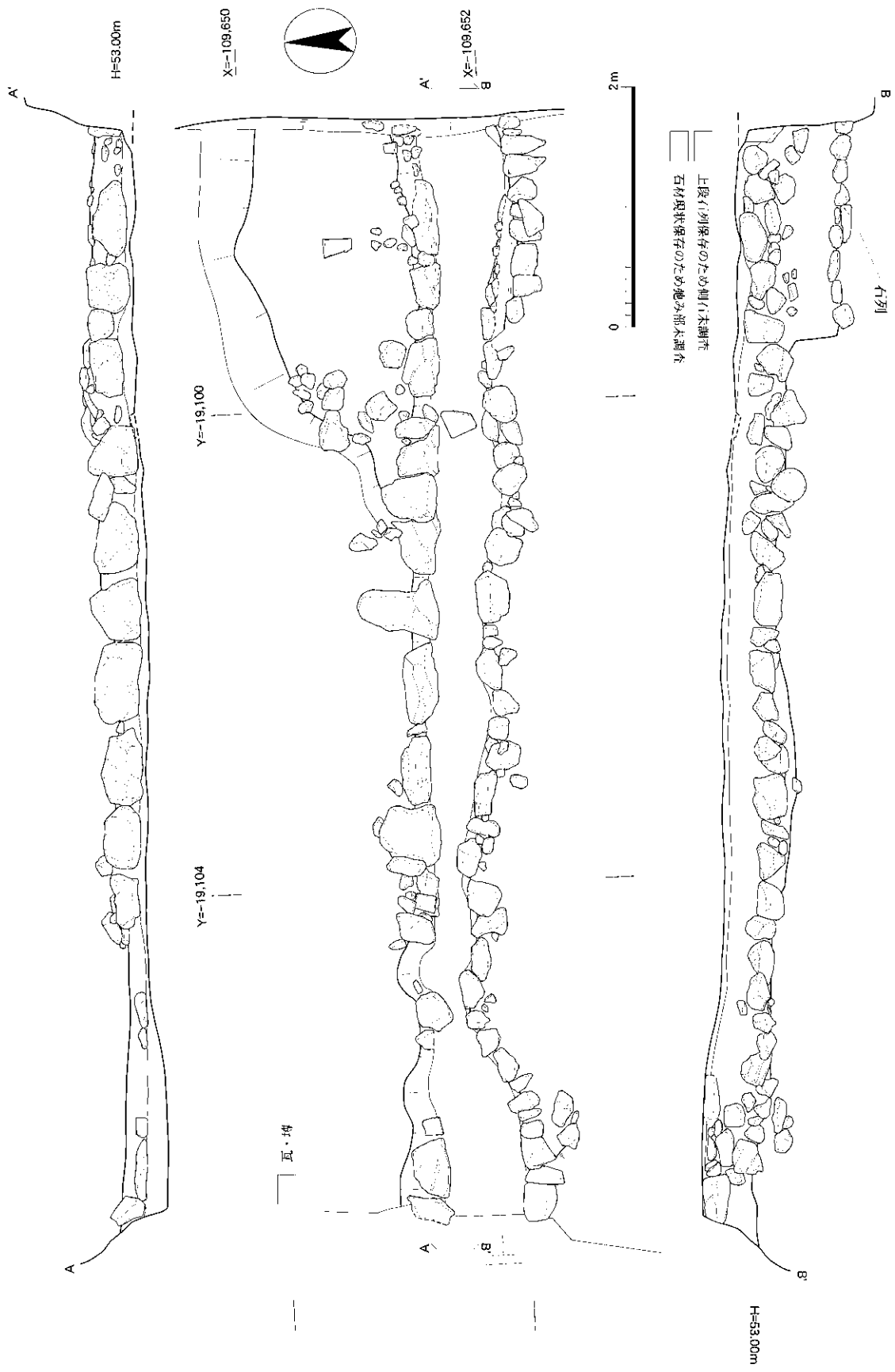


図 11 石組溝・石列西部実測図 (1 : 50)

き取られたと考えられる石抜き取り穴を3箇所検出している。湿地状堆積からは三葉葵紋の軒丸瓦が出土している。

石列（図10・11） 調査区中央、石組溝の南側壁直上で東西方向に約5mほど検出した。北に対して面を面をもち、石材小口を石列面に直交させて並べる。この石列の東西延長部は、南禅会館基礎のため多くは削平を受けたものと考えられる。石列は2段積み上げている所が1箇所ある。石組溝が埋まった後、参道北端を踏襲して参道を再整備した可能性が高い。石材は長軸約0.4m・幅約0.2m・高さ約0.1mで、石組溝より小振りであるが、石組溝と同種である。

この石列は石組溝が埋まった後、その直上約0.3m上で並べられており、その保存のため下層の石組溝下段の一部は調査できなかった。

4. 遺物

本調査では、中世の瓦と埴が石組溝の埋土および参道盛土から多量に出土した。瓦と埴の出土比率は埴が9割以上を占めるが、それらのほとんどは破片である。軒平瓦・平瓦の出土量は少量である。

石組溝内と石列を覆う土層31（図5）から室町時代後期と考えられる土師器が出土したが、小片のため図化していない。

その他、鎌倉時代から室町時代にかけての土師器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器・瓦・埴が出土したが、量は少なく、いずれも小片である。混入遺物には平安時代の平瓦・須恵器・白磁などがある。

鎌倉時代から室町時代（図12、図版5）

三巴文軒丸瓦（1） 石組溝底から出土した完形の三巴文軒丸瓦である。長さ36cm、瓦当部径15.6cm、胴部厚さ約2.5cmある。玉縁部凸面は横ナデを行う。焼成はやや甘く胎土が淡黄色化し、表面に炭素が吸着している。三巴文頭は右方向に巻き込み、尾は圏線化している。珠紋は巴の外に25個廻らす。胴部凸面は縄叩き痕の上に縦方向のナデ消し、凹面には細かい布目と斜め方向の

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、白磁、瓦				
鎌倉時代 ～室町時代	土師器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、埴		土師器5点、軒丸瓦2点、丸瓦1点、埴2点		
江戸時代	土師器・焼締陶器・瓦・土製品		土師器1点、軒丸瓦1点、土製品3点		
合計		34箱	15点（2箱）	32箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

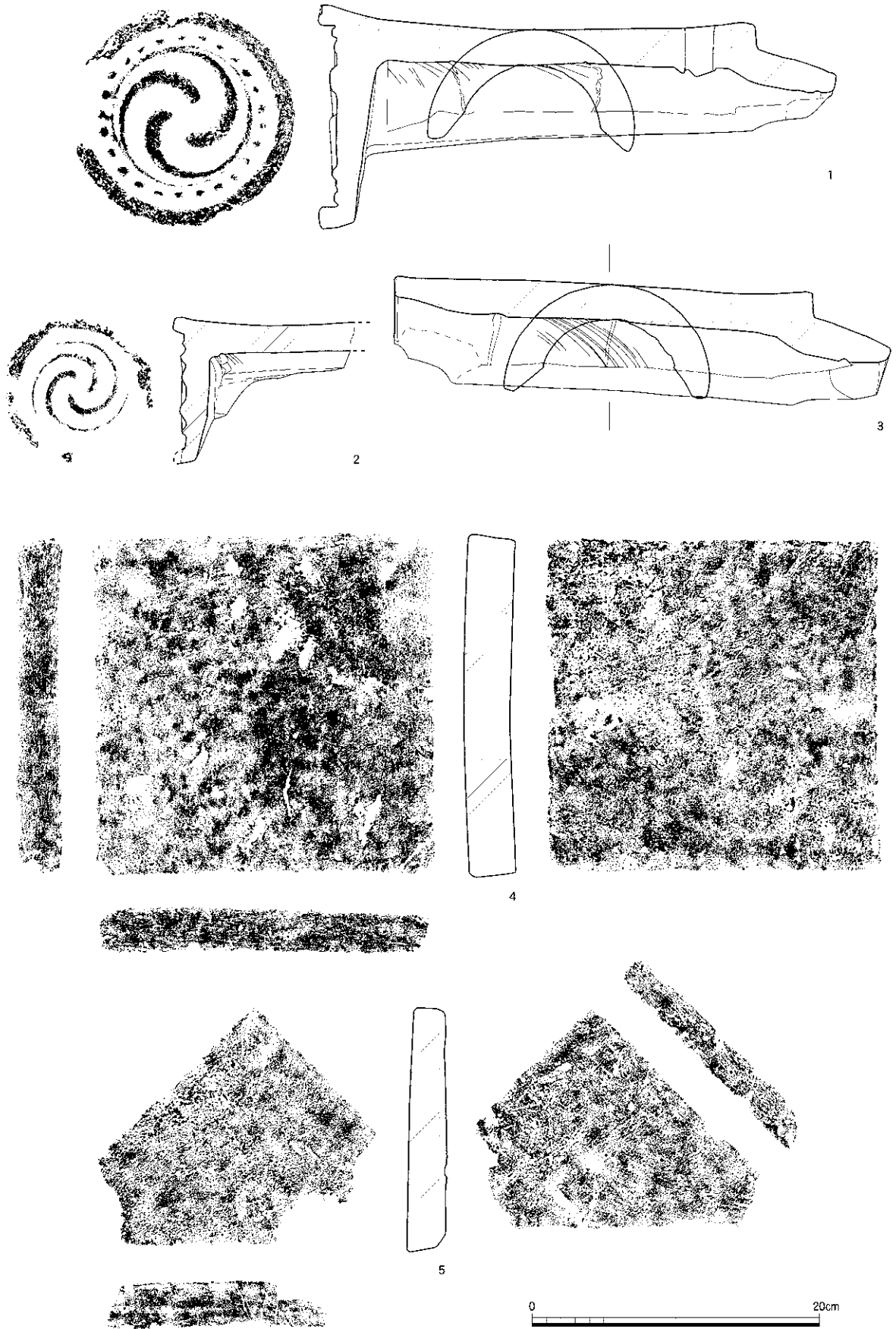


図12 鎌倉時代から室町時代の出土遺物拓影・実測図（1：4）

糸切り痕が見られる。胴部尻方向に径2cmの釘穴が存在する。また、約0.5cmの細い吊り紐の痕跡が2本横方向にある。これらの技法から鎌倉時代南禅寺創建期の瓦である可能性が高い。

三巴文軒丸瓦(2) 石組溝から出土した。瓦当径が10cm、胴部厚さが2cmある。焼成は良いが、炭素の吸着はなく、胎土・表面とも淡灰色である。

丸瓦(3) 石組溝から出土した。ほぼ完存し全長34.5cm、胴部中央幅14.3cm、厚さ2.5cmである。焼成は良好である。凹面の頭と玉縁部に面取りがある。表面の炭素が飛んで淡灰色化した部分が多い。凸面の縄叩きは丁寧な縦ナデによって消される。

四角埴(4) 石組溝内から出土した。一辺23cm、厚さ3cmある。全体に炭素が吸着している。裏面はナデで離れ砂が付着している。他の破片には糸切り痕が明瞭なものも多い。表面は製作痕は不明であるが、火を受けて赤く変色している部分がある。胎土は粗く大粒の長石を多く含む。

三角埴(5) 石組溝内から出土した。方形の埴の対角線で割って2分割したものである。焼成以前に分割されている。長軸辺の下側は面取りを施してあり、四半敷きに嵌めやすい工夫の可能性はある。面取りのない表面は真っ赤に焼けている。厚さは2.7cmである。

土師器皿(11) 石組溝内から出土した。土師器のへそ皿である。端部が欠落しており正確な年代は決めがたいが、へそは低い。白色系土師器であるが、ややピンクがかっていることから室町時代後期(15世紀末～16世紀初頭)の可能性が高い。

土師器皿(12～15) 石列を覆う土層31から出土した。量的にまとまって検出したが、小片である。復元して凶化できるものはない。口縁部が厚手化したものが多く、口縁部内面端部に浅い窪みが廻る。口縁部外面のナデ幅は長い。室町時代後期(15世紀末～16世紀初頭)の土師器皿である可能性が高い。上記の石組溝内の土師器と同じく、ピンクがかった白色系で時期差は余りないものと考えられる。

江戸時代(図13・14、図版5)

三葉葵紋軒丸瓦(6) 調査区西端の湿地状堆積から出土した。推定瓦当径は約14cmである。瓦当の厚さは2cmで薄い。胎土は淡灰色で表面に炭素が吸着する。瓦当模様部表面に雲母の粉が付着する。瓦当裏面は丁寧なナデ調整である。江戸時代後半の遺物と共伴している。調査地南の

金地院が三葉葵の軒丸瓦を使用している。

土師器皿(7) 参道上部を覆う砂層から出土したやや灰色がかった土師器皿で、次に述べる土製品と共伴遺物である。径8.2cm、器高1.8cm、底部内面に深い圏線が廻る。時期は江戸時代中期後半の18世紀後半代である。

狐土製品(8・9) 素焼きの狐の頭部である。型造りで離脱材の雲母が表面に

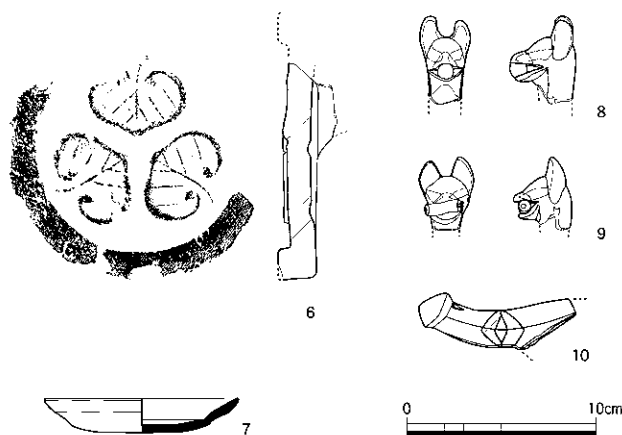


図13 江戸時代の出土遺物拓影・実測図(1:4)

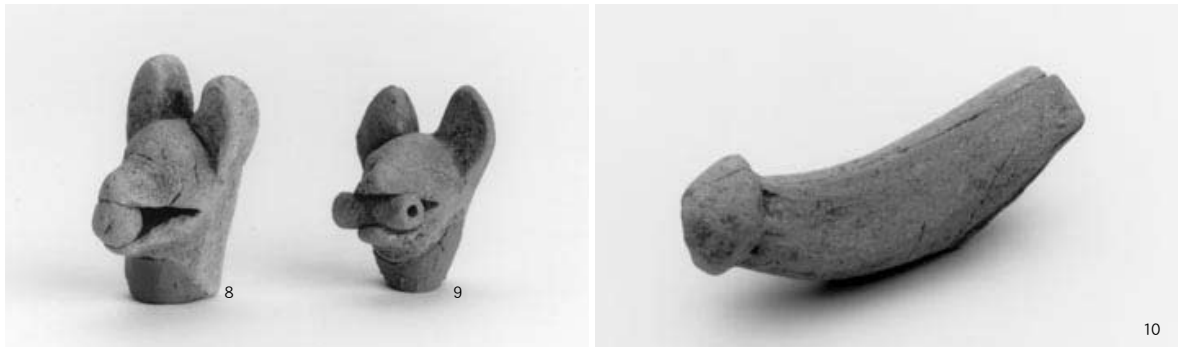


図 14 出土土製品

付着する。胎土は密で赤褐色を呈する。玉をくわえた狐と巻物をくわえた狐の2種類がある。顔中央で型を貼り合わせて粘土を接合しており、中空である。その他大きな狐の断片が存在するが、破片のため規模は不明である。彩色の痕跡はないが、伏見人形であろう。

陽物土製品（10）反りのある棒状土製品で、先端をやや膨らませて丸く収める。残存の長さ 8.3 cm、厚さは約 2 cm である。2つの型を接合して作る。中空で型に沿って2つに割れた状態で出土した。表面にキラコが付着している。ここでは陽物としたが、狐の尻尾の可能性も残る。胎土は密で赤褐色を呈する。この土製品も素焼きで彩色の痕跡はない。

5. ま と め

南禅寺の歴史は、創建時から今日に至るまで「搬土曳石」の歴史であるといわれている¹⁾。今回の調査によって、盛土によって造成された参道と、大型の石材で組まれた溝を検出したことは、その歴史の一端を示す大きな成果である。

南禅寺伽藍は、14世紀末の明德四年(1393)と15世紀半ばの文安四年(1447)、応仁元年(1467)に主要伽藍が焼亡したとされている。今回出土した石組溝内から出土した瓦や塼の中にも火を受けているものがあり、いずれかの火災後に破棄された可能性が高い。

参道盛土や石組溝内からは平安時代から室町時代にかけての遺物が出土しており、室町時代には両遺構が存在していたことは確実である。しかし、石組溝北側の盛土内にも焼けた瓦や塼が入っていることから、石組溝は鎌倉時代の創建期までは遡らないものと考えられる。さらに、石組内から出土した土師器は応仁の乱(15世紀中ば)を遡らないと想定できる。一方、石組溝の直上に並べられた石列付近において15世紀末～16世紀初頭の土師器が出土している。したがって15世紀中頃に参道と石組溝が整備され、15世紀末～16世紀初頃までに石組溝が埋まり、石列が新たに組まれた可能性が高い。

石組溝内からは、南側の石組から崩落したと考えられる石材が多数出土している。このことから石組南側は、当初、参道上端付近までほぼ垂直に積み上げ、参道北端の石垣を形成していた可能性がある。

石組溝の石材の積み方は、自然石を使用した野面積みであるが、石材の長軸を溝に並行に並べられており奥行きがない。さらに、この石組溝には、栗石などによる明確な裏込めは認められなかった。

このことは、今回検出した石組溝南側の上列が、参道の土圧によって大きく溝内側に弛み出して崩壊していたことと関連があろう。また、割れやすい頁岩や粘板岩なども用いていることから、堅牢な石垣を積む技法が確立していないことを示しているのかもしれない。それに対して、石組溝直上で検出した石列の組み方は、細長い川原石の小口を面にし、面に対して重心を後ろに置くように並べている。この技法は、中世に始まる牛蒡積石組井戸や中世末期には存在したと考えられている穴太積技法に近い。であるならば、牛蒡積みに近い石列と下層の石組溝との間に技法差が考えられる。

また、断割調査によって明らかになった、石組北側の集石の存在や南側石組下に平坦な石が据えられていた事例は、石組溝造作前に、さらに古い段階の類似した遺構がある可能性を窺わせる。

なお、埴が多量に出土していることから、近隣に埴を敷いた建物などが存在した可能性がある。

一方、検出した遺構と、現存する南禅寺関連施設との関連について述べると、調査区西部が現状でも西に落ち込むことから、当初はL字状に南に曲がる参道であった可能性があり、禅宗特有の直線を避ける意識が窺える。また、参道の砂層を主体とした江戸時代中期後半の盛土からお稲荷さんなどの土製品が多数出土したことは、旧南禅会館が建つ前に存在した綾戸廟関連の遺物である可能性が高い。

検出した石組溝と調査地東方に位置する現在の放生池の高低差を比較すると、石組溝ははるかに低く両立していたとは考えにくい。このことから現在の放生池は石組溝が埋まった後、調査区北半の落ち込みを礫によって人為的に嵩上げた江戸時代初頭以降に築造された可能性が高くなった。また、京都における五山の伽藍配置では、放生池の位置が勅使門と三門の間にあるのが通例であるが、南禅寺の場合は勅使門の外にあり、唯一の例外となっている。「五山上」にしては現状の放生池では他の五山の池と比べて規模が小さすぎ、従来の中世南禅寺伽藍配置復元案が、現在の放生池を中心にされていることは、再考する必要があるだろう。

平成24年に「或時搬土、或時曳石²⁾」と唱えて南禅寺伽藍を建立した「創建開山」規菴祖圓（南院国師）の「遠諱七百年」を迎える。南禅会館が建て替えられることになったのも「遠諱七百年」を記念しての事業である。「搬土曳石」そのものである遺構が、文化庁の指示と宗教法人南禅寺の理解のもとに保存されることとなった。

註

1) 中村文峰『南禅寺』淡交社 2008年

2) 『南院録解制上堂』の語。櫻井景雄『南禅寺史・上』法蔵館 1977年 34頁

6. 付章 自然科学分析

(1) 石組溝の石材 (図 15)

溝を構成している石組の石材の材質は、花崗岩・チャート・砂岩・珪質頁岩～粘板岩・頁岩～粘板岩・珪岩・ひん岩が認められ、石材の数量もほぼこの順であった。これらは東山から北山にかけての山地を構成している岩体である。石材は表面が中程度に円摩されており、岩体から直接切り出したものではなく、おそらく谷筋か鴨川流域で採取され運ばれたものであろう。上段で検出した石列も同じ組成である。なお、石材については京都府立山城郷土資料館の橋本清一氏にご教授を受けた。

(2) 種実等の分析 (図 16、表 3)

調査地の植生を調べるため、北部落ち込みに堆積していた粘質土層 12・14 と石組溝内に堆積していた上層・下層の粘質土層 38・39 をサンプリングして 0.25 mm メッシュのシルクスクリーンで選別した。

落ち込み内粘質土上層の層 12 からは山野であちこちに見られるアカメガシワ、下層の層 14 は抽水性のミズアオイが見られただけで、全体に長期に堆積した土壌の種実等の内容とは考えられない。短期間に堆積した可能性が高いと考えられる。

溝内は上層では木本としてフユイチゴを含むキイチゴ属・庭木にもされるヒサカキ・タラノキなどのウコギ科・ツツジ科・草本はミズ属を含むイラクサ科・スイバを主にしたタデ科・ナデシコ科・キジムシロ属・セリ科・カヤツリグサ科が多く見られた。水湿性のはイボクサなどがあるが、ほとんどは田・畑・道端などに生育するものである。下層の木本はキイチゴ属のみ、草

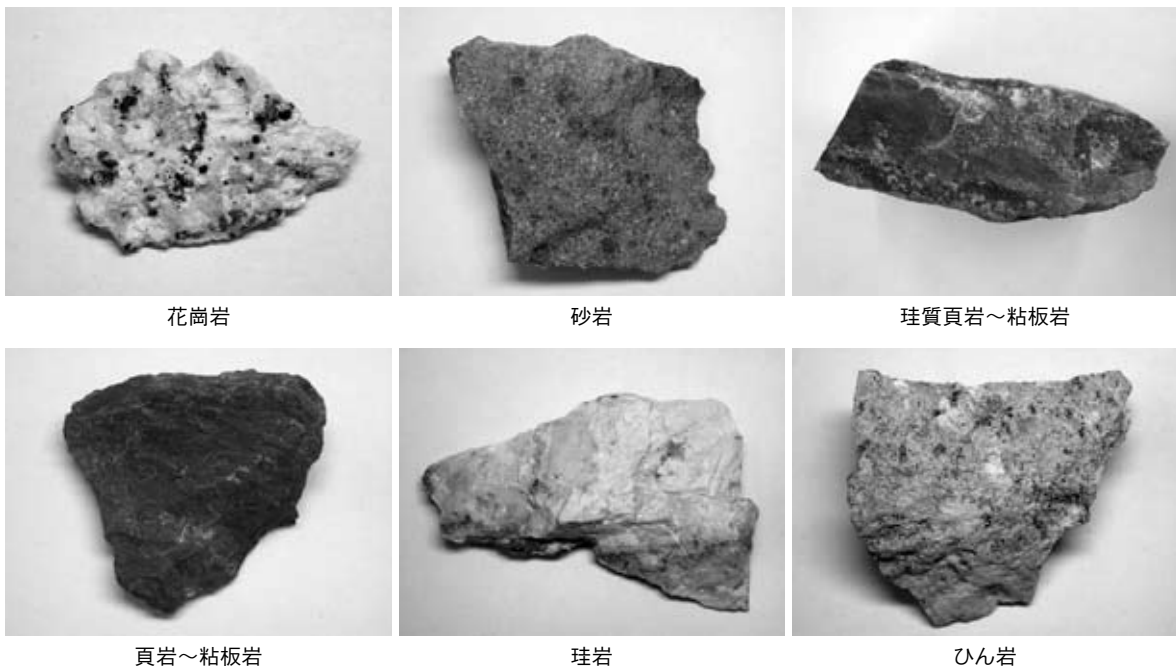


図 15 石組溝石材

本はカヤツリグサ科のスゲ属が増えるだけで、全体の種類数は上層より少ない。溝内は常時滞水した状況ではなかったと考えられる。

表3 自然遺物一覧表

木本				サンプリング量	約90mℓ	約60mℓ	約100mℓ	約60mℓ
番号	和名	部位	科名	生育場所	湿地上層 (個数)	湿地下層 (個数)	石組溝上層 (個数)	石組溝下層 (個数)
1	ヒサカキ	種子	ツバキ	山地・庭木			5	
2	フユイチゴ	核	バラ	山地の日陰			2	
3	キイチゴ属	核	バラ	山野・道端			27	5
4	キイチゴ属?	トゲ	バラ	山野・道端			1	2
5	アカメガシワ	種子	トウダイグサ	山野	1			
6	タラノキ	果実	ウコギ	山野			1	
7	ウコギ科	果実	ウコギ				1	
8	ツツジ科	種子	ツツジ				2	
草本								
番号	和名	部位	科名	生育場所	湿地上層 (個数)	湿地下層 (個数)	石組溝上層 (個数)	石組溝下層 (個数)
9	イラクサ科	種子	イラクサ				8	5
10	ミズ属	種子	イラクサ	山野の湿った所			1	
11	ギシギシ属	花被	タデ	野原・田畑のあぜ道			15	19
12	スイバ	果実	タデ	野原・田畑のあぜ道			14	9
13	ミゾソバ	果実	タデ	山野・道端の水辺			5	2
14	タデ科	果実	タデ				5	
15	ザクロソウ	種子	ザクロソウ	道端・畑			9	
16	スベリヒユ	種子	スベリヒユ	畑・道端				1
17	ハコベ属	種子	ナデシコ	道端・畑・山野			8	32
18	ノミノフスマ	種子	ナデシコ	水田・畑・野原			3	
19	アカザ属	種子	アカザ	荒地・畑			1	1
20	イノコヅチ	花被	ヒユ	山野・道端			1	
21	ドクダミ	種子	ドクダミ	いたるところ			1	
22	アブラナ科	種子	アブラナ	山野・道端・湿地			2	1
23	キジムシロ属	果実	バラ	山野			7	8
24	カタバミ属	種子	カタバミ	庭・道端			3	1
25	スマレ属	種子	スマレ	口当たりの好い山野・道端			2	
26	セリ科	果実	セリ				9	3
27	コナスビ	種子	サクラソウ	原野・道端			1	
28	トウバナ属	果実	シソ	山野			1	
29	イヌコウジュ属	果実	シソ	山野			1	1
30	シソ属	果実	シソ	山野・道端			1	
31	アキノタムラソウ	果実	シソ	山地・野原			1	2
32	ナス科	種子	ナス	山野・道端・畑			2	5
33	キキョウ科?	種子	キキョウ				1	
34	ヤブタバコ	果実	キク	田の縁・林の陰			1	1
35	メナモミ	果実	キク	山野			1	
36	キク科	果実	キク				1	1
37	ミズアオイ	種子	ミズアオイ	水田・池沼(抽水)		17		
38	イボクサ	種子	ツユクサ	水田・沼地			2	
39	エノオコログサ属	穎	イネ	いたるところ			1	
40	スズメノヒエ属	穎	イネ	原野				1
41	スゲ属	果実	カヤツリグサ					5
42	カヤツリグサ科	果実	カヤツリグサ				12	8
43	不明					4	1	
その他								
番号	和名	部位	科名	生育場所	湿地上層 (個数)	湿地下層 (個数)	石組溝上層 (個数)	石組溝下層 (個数)
44	昆虫						38	45
45	ダニ						2	

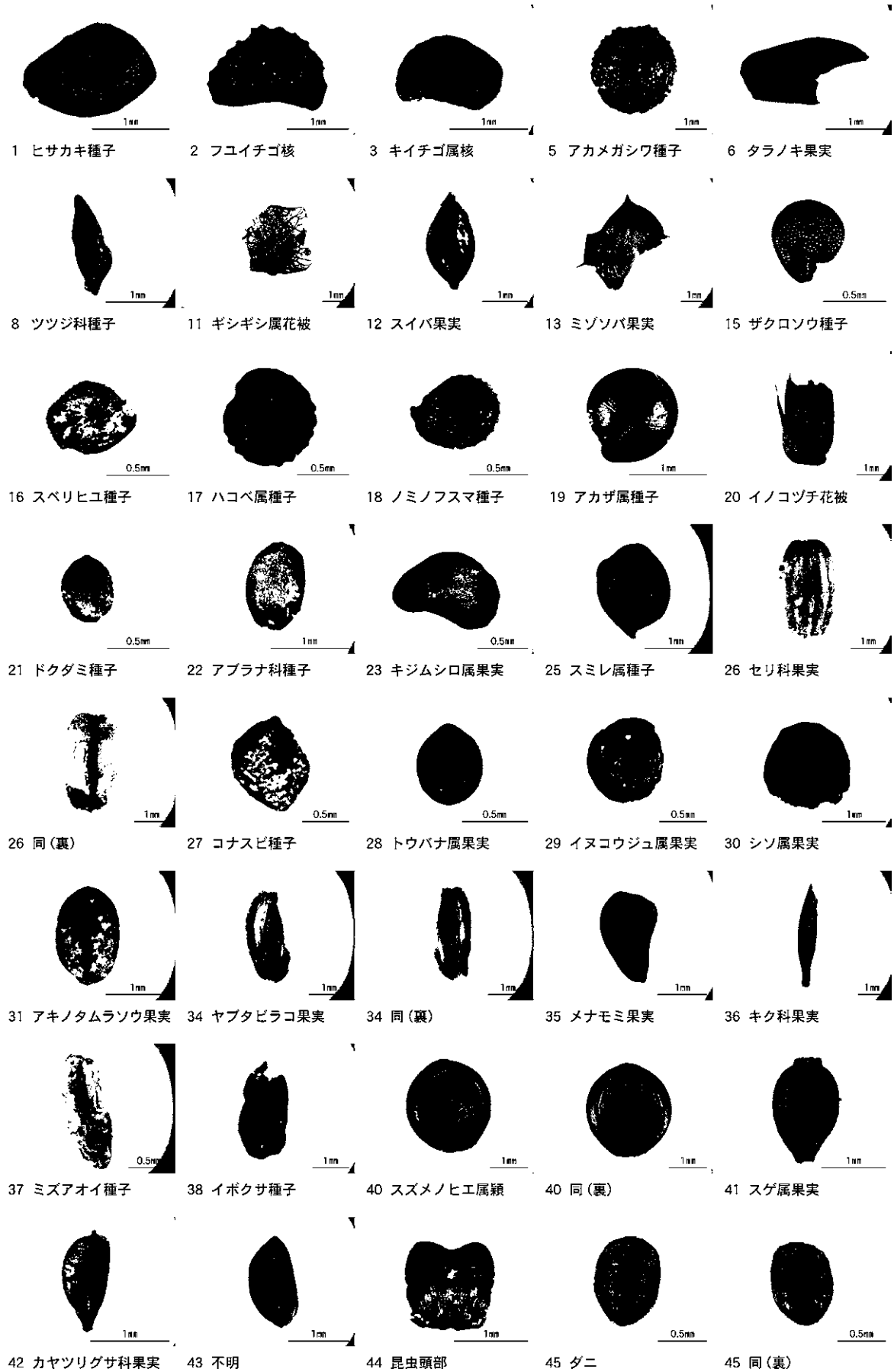


図 16 自然遺物

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせき なんぜんじけいだい							
書名	史跡 南禅寺境内							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2009-2							
編著者名	東 洋一							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2009年6月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせき 史跡 なんぜんじけいだい 南禅寺境内	きょうとしききょうく 京都市左京区 なんぜんじふくちちやう 南禅寺福地町 ちない 地内	26100	A321	35度 00分 41秒	135度 47分 27秒	2009年4月 22日～2009 年6月2日	328㎡	建物建替え
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
史跡 南禅寺境内	史跡	平安時代			土師器、須恵器、白磁、瓦			
		鎌倉時代 ～室町時代	参道、石組溝、石列		土師器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、埴			
		江戸時代	参道、整地層		土師器、焼締陶器、瓦、土製品			

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-2
史跡 南禅寺境内

発行日 2009年6月30日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961